The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	〈少女〉を探して ： 『小公女』にみる理想の少女
Author(s)	鳥集, あすか
Citation	待兼山論叢. 文化動態論篇. 2012, 46, p. 39-57
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27227
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈少女〉を探して

── 『小公女』にみる理想の少女 ──

鳥　集　あすか

キーワード：『小公女』，F.H.Burnett，*A Little Princess*，『少女の友』，『少女倶楽部』

はじめに

フランシス・ホジソン・バーネット（F.H.Burnett、1849-1924）の書いた*A Little Princess*（1905、以下『小公女』と表記）は、時代と共に様々な翻訳が発行され、多くの日本の読者に繰り返し読まれ続けてきた。同じくバーネットの原作であり、若松賤子によって翻訳された『小公子』（原題：*A Little Lord Fauntleroy*）のような爆発的なヒット作こそないものの、書籍化に留まらずアニメ化やドラマ化が絶えず行われているという事実は、『小公女』が現在の日本においても広く受け入れられていることを示している。

日本で最初に『小公女』が翻訳されたのは1910年のことであり、原著の発行からたった5年しか経っていない。[1)]『婦人くらぶ』に掲載された「小公女」は、若松賤子の『小公子』から名前を得たことによってか、国内の翻訳小説においては珍しく、「小公女」という一つの名前で広く知られることとなり、これを皮切りに、様々な少女雑誌に翻訳や抄訳が掲載されることとなった。戦前戦後を通して、『小公女』ほど多くの少女雑誌に掲載された翻訳少女小説は存在しないだろう。まさに『小公女』は、少女教育の一環として日本に受容されたといえる。

ヒロインのセーラは、もともと裕福な家庭に生まれた子どもという設定だが、その境遇は冒頭で語られるのみであり、物語の大部分は窮状に陥ったセーラの暮らしを記述することに割かれている。したがって、この物語は、貧しく辛い状況から一挙に裕福な身の上になる少女の物語だといえよう。この手の物語には、主人公を苛める意地悪な悪役が必要不可欠であるが、『小公女』もまたその例には漏れず、セーラが入ることになる塾の経営者であるミンチン女史がその「悪役」を務めている。利発で生意気な主人公と規則に厳格なオールドミスの教師の対決という構図は、いつの時代でも見受けられるものだ。

しかし、ミンチンとセーラの対立軸を詳しく見ていくと、彼女たちの対立が単にプロット上必要とされたものだけではないことがわかってくる。セーラとミンチンという二人のキャラクターの対立を詳しく分析することで、『小公女』が近代家父長制の強化という社会的メッセージを含んでいるという事実を明らかにし、日本の少女教育の研究に一石を投じることが本論の目的である。なお、本論ではセーラの性格に関しては原作及び日本で発行された「少女雑誌」に掲載された作品を中心に分析を行う。正確には、『少女の友』（1919年）に掲載された「〈小公女〉梗概」、『少女倶楽部』（1936年）付録の『小公女』、『ひまわり』（1950年）に掲載された『小公女』である。これらは全て抄訳であり、「みな簡単に短くしたものばかり」（伊藤、376）ではあるが、それ故に少女向けに書き換えられた物語の姿を見ることができる。

1. セーラ

1－1. セーラのキャラクター

第一章では、セーラを中心に、『小公女』の基本軸を見直していく。指し当って、まずは原作と翻訳版それぞれに描かれるセーラ像を明らかにす

ることからはじめたい。

原作版では、イギリス社会の外部（インド）から来た他者であるセーラが、物語の進行とともに帝国レディへと変化していく様子が描かれている。児童文学を研究する川端有子は、セーラが「“odd”（1）、“quaint”（4）、“queer”（6）といった言葉」で形容され、さらに「ヒロインにしては稀な“fine hot temper”（27）、“a fine bit of unheavenly temper”（54）の持ち主」[2)] であることを指摘している（川端、2001：18）。つまりセーラは当時のイギリス社会的な理想の少女ではないことが作中では強調されており、アングロ・インディアンの子どもという、当時のイギリス社会における他者として描かれている。その後、物語が進むに連れて、セーラはロッティという塾で一番小さな4歳の生徒の“mamma”になることで、徐々にイギリス社会への適応を見せる。そして、それとともにセーラのアングロ・インディアンの子どもという面が強調されて描かれなくなり、気性は和らげられ、代わりに母性が強調されていく。更に、‘I should like to be your “Little Missus” myself’（172）.とあるように、インドからきた病身の紳士（実はセーラの父の親友であり、最終的に彼女へ財産を与え窮地から救い出す役割を与えられている）に対して、彼の「小さな奥様」になりたいと願うセーラの姿は、「母」だけでなく「妻」としての役割も提示されるようになる。川端が、『小公女』とはセーラが「甘やかされた〈インドのお嬢様〉から、フランス革命下の逆境にも負けぬ〈高貴な王妃マリー・アントワネット〉を経て、大英帝国の家庭を統べる〈帝国のレディ〉へと変化を遂げていく」（川端、2006：118－119）物語だと論じているように、インドからイギリスに来た文化的に他者である少女が、祖国で立派なレディへと変化していく過程を描いたのが原作の『小公女』である。

一方、日本に来たセーラの性格は、多少の修正が加えられている。原作とは異なり、セーラは「いつもお姫様のやうな、気高い、優しい心を、失

わないやうに心がけて」おり、「お友達にもまことに優しく」（共に『少女の友』8号、46）、「［王女になったつもりで］いつも心を清く高く持ち、富める娘であつた時も、決して驕り高ぶるといふやうなことはなく、貧しい孤児となつた時でも、決して、いぢけたり、ひねくれたり」（『少女倶楽部』、前書き）しない少女……といったように、原作での最後の部分、（川端の言葉を借りると「大英帝国の家庭を統べる〈帝国レディ〉」としてのセーラ像）だけが強調されている。元来セーラのもっていた気性の荒さを示す箇所は削除され、良妻賢母的な女性像のみが強調されているのである。また、酒井昌代は、翻訳された『小公女』の挿絵と文章を原作と比較することで、日本版では、「［セーラの］まなざしに象徴される〈子どもらしくない〉思慮深さが後退」し、「大人を脅威させる知性は、再話ではほんの少し背伸びした〈賢さ〉に置き換えられ、代わって7歳の少女の愛らしさが前面に現れ」（酒井、42）ていることを指摘している。セーラは、「原作よりもずっとか弱く、おどおどしており、読者の同情や憐れみを誘う」（酒井、43）人物として描かれている。このように、日本に来たセーラは、いついかなるときでも気高く優しく、しかしそれでいて、庇護されなくてはならない、か弱い「お嬢様」なのである。

1－2. セーラの「つもり」遊び

さて、名実ともに「お姫様」であったセーラが財産を失い、無一文の孤児になったとき、彼女の精神性を支え続けたのは空想による「つもり」遊びであった。「お姫様」の「つもり」でい続けようと心がけて行動する彼女の姿こそ、各少女雑誌が創刊以来こぞって掲げる「少女像」と迎合したといえる。例えば、「女中代わりをして居ながら成績常に優等なる生徒」（『少女の友』2巻3号）や、「子守をしながら勉強して教員になつた少女」（『少女の友』2巻4号）といった記事のタイトルからもわかるように、少

女雑誌には、貧しい境遇にありながらも努力を怠らずに成功した少女の美談が度々掲載されていた。そして、美談の主人公たちの貧しい境遇にも負けない行いは、理想の「少女」の姿として読者たちから絶賛された。

当時の理想とされた「少女」とは、その内面をもって体現されるものであった。明治以降、近代家父長制とともに登場した「少女」という制度は、「少年」と全く異なるステップが準備されていた。少年にとっての少年時代が学問の習得により立身出世を目指す準備段階であったことに対して、少女たちの少女時代とは、結婚時代とも子供時代とも切り離された「それのみで完結するような特別な時代として意味づけられ」（今田、54）ていた。少女たちには、少女時代の次のステップが存在しなかったのだ。結果、彼女たちは外界に対しての興味よりも、自身の内面に対してその目を向け始める。「理想の少女」とは、少女たちの意識が向かった内面にある。そしてその内面は、美談に語られるような「美しい心」という言葉でもって表現されていた。

セーラが実行した何かになった「つもり」もまた、空想による内面の充足を示している（ちなみに、原作では、セーラは「つもり」遊びに限界を感じ、疲れと飢えの余り癇癪を起こしている）。どんな境遇においてもいじけることなく「お姫様」の「つもり」で振る舞いつづけた日本版のセーラは、理想の「少女」を体現しているのである。

1－3. お姫様、もしくは王女様であること

さて、理想の少女を体現するセーラが、自身を奮い立たせる糧として目指していたものが「お姫様」であったことにも注目されたい。大塚英志は、「少女」とはすなわち生産や労働から切り離され、ただ消費のみを続ける存在であるとし、そのような消費の主体こそ「少女」であると論じた。インドでの裕福な幼少時代を送っていた頃、セーラは「ダンス服だけ

でも、十枚」（『少女倶楽部』、3）も持ち、何千円という買い物をして「寄宿舎の一番立派な部屋をあたえられ」（『ひまわり』、63）ており、親の金に物をいわせて何でも持っていた。「お嬢様」セーラは、まさに「少女」そのものであったといえる。「お姫様」は、自らが生産に加担することは決してなく、消費をするだけの存在である。いいかえると、「お姫様」こそ大塚や今田の述べる「少女」の究極体なのである。

父の死とともに全財産を無くしたセーラは、消費に対する欲望を空想で補い、貧乏になってからも自分は「お姫様」であり続けようとした。

> 「あたしはいつも王女だわ。……あたしは今、何かの間違ひで、乞食娘になった王女だとおもっていればいゝんだわ」（『少女倶楽部』、41）

> 「こんなにみじめな境遇に落ちても、セーラは決して心までもみじめな小使娘にはなりませんでした。一日の仕事に疲れはてて、床に入ると、〈屋根裏の王女〉と、そっとつぶやいて、淋しく笑うのでした。」（『ひまわり』、64）

そして、作中で散々貧しい暮らしに苦しんだにもかかわらず、物語の最後でセーラは、そのような貧しい境遇にあったときも、自分は女中になったお姫様を演じていたのであったにすぎず、自分の人生に女中であったことなど一度もなかったのだ、と回想している。

> 「あの時［女中になっていた時］のことは、やつぱりつもりだつたのよ。これがほんたうなのよ」（『少女倶楽部』、88）

彼女はどのような境遇にあっても、自分が「お姫様」であることを信じ続けた。そして、物語の最後で、再びお金持ちの「お姫様」になることで、消費の主体としての自己を再び取り返すことに成功する。

日本で再話として語られた『小公女』は、「少女」の矜持を持った良妻賢母予備軍のセーラが、貧しい境遇にあってもその美しい心（内面）を無くすことなく立派にお金持ちに返り咲く物語であった。貧乏な境遇から再びお金持ちになるセーラの物語は、一種のシンデレラ神話と同じ構造を持った話だといえよう。

2. セーラとミンチン

物語全体を通して、「正義」であるセーラは、日本版では「少女」の究極体として描かれていることがわかった。何者にも優しく、完璧で、美しくお金持ちのセーラはみんなから好かれていた。しかし、興味深いことに、セーラが唯一毛嫌いし、また、セーラを嫌っていた人物がいる。それが、物語の中でセーラの「敵役」として描かれるミンチンである。

> Sara often thought afterwards that the house was somehow exactly like Miss Minchin. ... 'I don't like it, papa' she [Sara] said (7).

> [S]he [Minchin] began from that minute to feel rather a grudge against her show pupil [Sara] (24).

上記のように、ミンチンをそっくりそのまま示したような家の調度品に対してセーラは反感を覚え、ミンチンもまた物語の冒頭部でセーラに対して嫌悪感を抱いている。原作でも、翻訳版でもミンチンとセーラは、初めから敵同士として描かれるのである。

しかしながら、彼女たちはこのように敵対者として描かれていながらも、実はいくつかの共通点を持っている。雰囲気は異なれど高い身長、大きな瞳、そして、その瞳から発せられる鋭い眼差しがそれである。さらに、彼女たちは同じような気性も兼ね備えていた。廉岡糸子は、ミンチン

の性格を「何事に対しても己の決断に重きを置き、他を省みない態度に始終している」（廉岡、132）と指摘するが、この引用部の「ミンチン」の名前をそのまま「セーラ」に置き換えても、全く違和感がない。同様に、川端有子はセーラを「強情で、尊大で、（略）狡猾な子ども」（川端、2006：110）と評しており、こちらも「子ども」を「大人」に置き換えるとミンチンの性格そのものを示しているといえる。そしてこのような強情で自己中心的な彼女たちの精神意識は、高原英理が「少女型意識」とよんだ、「少女」の精神性と非常に似ているといえないだろうか。つまり、一見正反対の人間ように描かれているセーラとミンチンであるが、彼女たちは二人とも「高慢」という極めて少女的な性格を有しているのである。

それではなぜ同じようなキャラクターを兼ね備えていながらも、ミンチンは「悪をもたらす人物」（廉岡、133）とされ、セーラは悪に対抗する人物として描かれるのであろうか。この二人の描かれ方の違いには、「意地悪な教師」と「それに反発する生徒」という、学園小説によくあるようなプロット・デバイスとしてのキャラクターの対立を超えた何かがあるのではないか。そしてその「何か」こそ、『小公女』が様々な少女雑誌に掲載された理由である。

2－1. ミンチンのキャラクター

前章では、『小公女』に描かれるお姫様セーラが、いかに日本の少女雑誌がこぞって理想とした「少女」（社会的なステップと生産性から切り離された存在）とマッチしていたかに関して論じた。

本章では、セーラと敵対関係におかれているミンチンを中心に、なぜ彼女が「悪」として描かれているのかに関して分析したい。まずはセーラと同様に、原作と翻訳版それぞれに描かれるミンチン像を明らかにしていく。

セーラとは異なり、ミンチンは原作でも日本語版でもほぼ同じ人物造

型を与えられている。原作で“tall and dull, and respectable and ugly”（7）とされた彼女は、「陰気な意地の悪い人」で、「心の中では、セーラを余り好いては居りませんでしたが、学校の利益になる富豪の娘のセーラを、嫌がらせない為に、いつもセーラを誉めそやす」（『少女の友』8号、47）人物であり、「一文なしになつたセーラに、ミンチン女史は、ことごとにつらくあたる」（『ひまわり』、64）嫌な女性として描かれている。さらに、自分よりも弱い者や貧しい者に対して慈悲を施すセーラとは異なり、無一文になったセーラに対して「乞食が私の厄介者になつた」（『少女の友』9号、47）と冷酷に言い放ち、損得勘定を十分に行ったうえでセーラを子ども達の教育係兼女中として学園にとどまらせるなど、その振る舞いは美しいとはいいがたい。

少女雑誌に掲載された抄訳版では、主にセーラの美徳的な行為に焦点が当てられるためにミンチンに対する描写はあまり多くはない。ミンチンのセリフはほぼ原作にあるセリフがそのまま翻訳されており、強いて原作との変化を述べるとすれば、挿絵に表されるミンチンの姿が、セーラに対して権力を振りかざして辛く当たる「敵」として描かれている点である。酒井昌代は、『小公女』の挿絵を比較し、原作では「大きく目を見開いて、高圧的なミンチン先生を見返している」（図1、レジナルド・B・バーチによる挿絵）のに対して、「興文社版と『少女倶楽部』版では、ミンチン先生がセーラを見下ろす構図が選ばれている」（図2、興文社版：96－97／図3、『少女倶楽部』版：38－39）ことを指摘している（酒井、44）。このような挿絵は、ミンチンの権威や威圧感を読者たちに視覚的に訴えるだけでなく日本版のセーラの弱々しさを表現するのに一役買っていたのはいうまでもない。

このように、セーラに対して辛く当たる「敵」であるミンチンを、廉岡糸子は「支配的で無慈悲な女で、寄る辺のない身の上になったセーラを劣

図1

図2

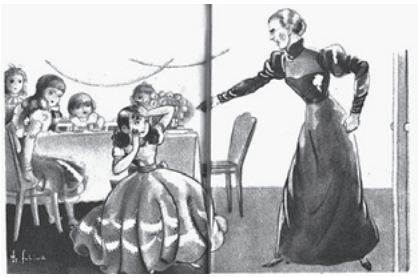

図3

悪な状況に陥れ、そんな自分の態度を正当化して恥じない〈悪徳〉の人」（廉岡、132）だと述べる。セーラがその性格に変化を加えられていたのに対して、ミンチンは原作とほぼ変わらないお金にがめつく意地悪で冷淡なオールドミスのイメージを読者に与えているのである。

2－2. なぜミンチンが「悪」として描かれるのか

『小公女』はドメスティック・メロドラマであり、美徳のある主人公セーラが「家庭を崩壊に導く悪に立ち向かう」（廉岡、133）物語であると主張する廉岡は、しかし、ミンチンの何が「悪」であるのかに関しては細かく言及しない。なぜミンチンはセーラの敵対者として描かれ、「悪」といわれなくてはならないのだろうか。

原作の『小公女』に対して川端有子は、ミンチンは「〈ビジネスウーマ

ン〉として、家父長的権威を代行する存在であり、セーラの抵抗の対象」（川端、2006：122）として描かれていることを指摘する。確かに、原作におけるセーラのポジションは「イギリス社会の外から来た、普通のイギリス人の少女らしくないアングロ・インディアンの、そして孤児の少女は、三重の意味でイギリス社会の周縁的存在」（川端、2006：115）であった。そして、それ故にセーラは「イギリスの社会の矛盾を、階級制度の不合理を」（川端、2006：117）指摘する形で、家父長的権威であるミンチンに立ち向かっているかもしれない。しかし、アングロ・インディアンとしての意味合いが無効化され、はじめから完成されたレディとして登場する日本のセーラは家父長的権威であるミンチンと立ち向かうのではない。セーラが闘うのは、「良妻賢母」にならないキャリアウーマンなのだ。

前章で分析したように、『小公女』はシンデレラ神話の再生産物語である。この物語で主人公として描かれるセーラは、幼いながらも「良妻賢母」であり、これこそが彼女の「美徳」であった。それでは、ミンチンはどのような手段を持って「家庭を崩壊」させているのかというと、彼女の「良妻賢母」という神話からはみ出した「キャリアウーマン」という生き方である。私塾を経営する彼女は、「職業的に自立した女性」だといえよう。再三述べているが、父の「小さな奥様」であり、ロッティの「ママ」であり、最終的にキャリスフォード氏のもとに納まってしまうセーラは、「良妻賢母」として家庭を守ることが仕事として与えられている。神話のヒロインであるセーラにとって、「家庭を崩壊させないこと」が正義なのである。それに対してミンチンは独身であり、男性と対等に渡り合うことで、自身が一城の主として権力を振るう。家庭を築かないミンチンは、「良妻賢母」をよしとする神話のストーリーのなかにおいて邪魔者（＝悪）でしかない。それ故に、彼女は「悪」として描かれなくてはならないのである。

2－3.「母」として生きられないキャリアウーマン

ここで興味深いのが、「家庭を崩壊に導く悪」であるミンチンが携わる職業である。彼女は、良家の女児のための私塾を経営している。廉岡糸子が「セーラが暮らしている場所［ミンチン女学校］は一つの家庭というわけではないが、親代わりのミンチン先生が率いる塾は家庭の代替といえるだろう」（廉岡、133）と述べるように、ミンチンもまた「母親」の役割を与えられている女性とはいえないだろうか。塾という一つの擬似家庭のなかで、女の子たちを健全かつ立派なレディに育成することが彼女の仕事なのである。しかし、彼女の教育はことごとく失敗してしまう。原作で “The fact was that Miss Minchin’s pupils were a set of dull”（111）といわれるほど、原作でも日本語版でも彼女が教育をした子どもたちは愚鈍で、気の利かない子どもたちばかりであった。そのなかでも群を抜いて頭の悪いアーメンガードと、我侭で聴かん坊のロッティには、ミンチンもほとほと手を焼いていた。ミンチンは、生徒たちを立派にしつけることができず、家父長制度下における「母親」としては欠陥品でしかない。それに対して、「良妻賢母」予備軍筆頭のセーラは、アーメンガードもロッティも簡単に手懐けてしまうのである。

> 「一番下のロチー［ロッティ］は、先生［ミンチン］も持余す程のやんちやでしたが、セーラのことを、『お母様〜〜』と呼んで慕ふやうになりました。」（『少女の友』8号、47）

キャリアウーマンこそ、ミンチンの正体である。視点を変えると、彼女は、自身が経営する私塾のための資金繰りに奔走する姿と、そして、男性と対等に立ちわたるだけの力を誇示するために張り切った姿がややオーバーに描かれているのに過ぎない。そして、仕事に就きながら子どもたちに教育をしようとすると、それはことごとく失敗してしまう。働く女性

であるミンチンは、男性中心社会の神話に回収されることはない。そのために彼女は「悪」として描かれ、「母親」としても欠陥品である彼女の育てる生徒は、皆愚かなのである。『小公女』は、良妻賢母の候補生であるセーラを「善」として描く一方で、働く女性を「悪」として描いている物語だといえよう。

3. 小公女のイデオロギー

3－1. デウス・エクスマキナの登場

物語の終盤で、セーラは父親の莫大な遺産を受け継いで再び金持ちに返り咲く。しかし、ここで最も注目しなくてはならないのは、セーラの返り咲きは、男性の親切（施し）によって成り立っているということである。セーラ自身は、実際自分が金持ちなるためには何の努力も行っていない。貧しい境遇におちいった際にも、「つもり」という空想で分不相応な振る舞いをしていたに過ぎない。彼女の心がけと、莫大な遺産の相続には全く関係がないのである。絶望的な状況にある物語をひっくり返すことのできる「デウス・エクスマキナ」（安易などんでん返しのためのプロット・デバイス）が登場しなければ、つまり、セーラ自身の努力だけでは、彼女は決して「お姫様」に戻ることはできなかったのだ。

興味深いことに、この物語は「どんな境遇になつても、清く正しい心を失ふことなく、どんな不幸に出会つても、決して、それに打ちひしがれることなく、強く正しきこと、セーラのやうに、人を愛し、人の幸福を願ふ」（『少女倶楽部』、前書き）ことを実践すればセーラのように幸福になれるというメッセージを過分に読者に与えている。本来ならば自分のものが手元に戻ってきただけ、という物語が、心がけ次第でお姫様になることができる、という成功譚に巧妙に摩り替わっているのである。

セーラの返り咲きは、デウス・エクスマキナの出現によってのみ起こり

うる「奇跡」であった。この奇跡は、しかし、現実の読者たちの身には到底起こりえない出来事であることはいうまでもない。野溝七生子の『山梔』には、セーラと同じように読書好きで勉強家の少女・阿字子が登場するが、セーラが結婚せずとも親の遺産によって悠々自適に生活ができることに対して、働かない、結婚も望まない阿字子は家の厄介者として扱われ、最終的には家を出て遠くに走り去ってしまう。結婚もせず、また労働もせずに消費の主体として「少女」でい続けるためには、無償で金銭を与えてくれる人物が必要なのである。セーラのように、お姫様たらんとする少女たちは、いずれその現実と立ち向かわなくてはならない。しかし、現実と立ち向かおうとした時、彼女たちは自身がセーラではなく阿字子であることを知るのである。いかに心を美しくしたところで、莫大な遺産が転がり込んできて、お金持ちになることはありえない。結婚も、労働もしなければ家で変人・厄介者扱いされるし、家を出れば野垂れ死にしてしまう。だからといってキャリアウーマンになれば、ミンチンのようになってしまう。結果、彼女たちが選ぶ選択肢は「結婚」しかない。

これは、今田が分析した「少女」の成功への道筋と全く同じ筋書を辿っているといえる。今田は、「良妻賢母」を目指した『少女倶楽部』に対して、『少女の友』に見られる少女の成功とは、「良妻賢母」ではなく「職業的に自立した女性」であることだと述べる。しかし、『少女の友』のなかで取り上げられる成功した女性たちのほとんどがスターや芸術家などといった実現しにくい職業であり、少女たちに「挫折させることによって、少女にその挫折は自分の努力ないし才能が足りなかったためであると納得」させた。

現実不可能な夢をあえて与える事で、少女たちに職業達成および経済的自立をあきらめさせ、その意識を結婚へ向かわせたのだ。つまり、「少女雑誌」に掲載された物語やスターの像は、どちらも少女たちに輝かしい未

来を提示しているかのように見せて、その実裏では彼女たちの将来を「良妻賢母」へと誘導していたのである。

3－2.「小さい奥様」へ

それでは、デウス・エクスマキナの力によって莫大な遺産を相続したセーラは、自立することができたのだろうか。

> 「再び、もとのプリンセス・セーラになりました」(『ひまわり』、66)。

> 「もう、心だけではなく、全ての生活が、お父様が生きていらしつた時よりも、もつと〳〵、豪奢に素晴しくなつたのです」(『少女倶楽部』、87)。

金持ちの異性との「結婚」という形で金持ちに返り咲いたのではないため、このエンディングは一見セーラの自立を描いたかのようにみえる。しかし、セーラはお父様の「小さな奥様」であり、ロッティの「ママ」であることで、おぼろげながらにも読者たちに「家庭」の姿を見せつづけてきたことを思い返して欲しい。そして、父の友人であるキャリスフォード氏に「発見」され、「まるでほんとのお父さまのやうに親しむ」(『少女倶楽部』、88) 彼女は、「小さな奥様」として再び男性に依存することで家庭の中心にその居場所を得たのである。男性によって発見されること、そして彼女がかつて父親の「小さな奥様」であった頃のようにカリスフォード氏に親しむ姿は、セーラの「良妻賢母」としての姿を提示している。物語のはじめは父の財力によって、そして最後は父の親友キャリスフォード氏の財力に依存することで、セーラはお姫様になる。セーラは男性に寄りかかることでしか、「お姫様」としての立場を確立することができず、結局、このストーリーは、いわばシンデレラ神話の再生産に過ぎないのである。

おわりに

本論では、セーラとミンチンという二人の人物から『小公女』の再話を読み解くことで、この物語に秘められたメッセージを分析してきた。セーラは、良妻賢母の候補生であり、理想的な少女そのものを体現するヒロインとして描かれている。シンデレラ神話と同じ構造で金持ちに返り咲く彼女は、家父長制社会において都合のいい理想の少女、ひいては理想の母・妻像を読者たちに与えていた。それに対して、セーラの敵であり悪の権化として語られるミンチンは、家父長制社会における「理想的な家庭」を築くことのできないキャリアウーマンである。働く女性であるミンチンの子育てはことごとく失敗し、彼女は妻としても母としても不良品であるだけでなくその冷酷で金にがめつい性格から、キャリアウーマンがいかに社会の悪であるかという印象を多かれ少なかれ読者に与えている。ここからわかるように、セーラとミンチンの対立軸は、単に意地悪な教師とそれに反発する利発な生徒という安易なものではなく、「働かない女性」と「働く女性」との違いにこそあったのだ。セーラと異なり、男性による保護を必要としない自立したキャリアウーマンであるはずのミンチンは「悪」というレッテルを貼られる。労働が「悪」であるから、キャリアウーマンになってはならず、だからといって、労働せずにただ消費し続けるだけの財力を欲しても、セーラの元に訪れたような「あしながおじさん」の出現には到底期待できない。そのため、『小公女』が読者に与えるメッセージというものは結局のところ、労働することなく貞淑に振る舞って男性に依存し結婚しなさいというものになってしまう。つまり、『小公女』は、近代家父長制という神話を維持するのに一役買ってしまった作品なのである。

注

1）『小公女』は、原著の出版経緯が少し変わっている。最初に*Sara Crewe, or What Happened at Miss Minchin's*（1887, 以下*Sara Crewe*と表記）という題名で発表された中編が1902年に舞台化され、またそれを長編として書き直したものが現在広く知られている『小公女』である。若松賤子による「セイラ、クルーの話。一名ミンチン女塾の出来事。」（1893）は*Sara Crew*の翻訳であり、藤井白雲子による『小公女』とは異なるタイトルがつけられた理由はここにある。また、白雲子による『小公女』は、「単行本として出版するやう予告したるが、読者の便利を計りて本号［『婦人くらぶ』1910.8］より付録として連載し行く事となしぬ」とされ、『婦人くらぶ』に連載されていたが、11月号で急に掲載は打ち切られている。出版事情があったかと思われるが、調査を行っていない。

2）川端有子の*A Little Princess*からの引用は、Puffin Books版（1994）に拠る。本稿での引用も同じ。

参考文献

一次文献

Burnett, F.H. *A Little Princess*. Puffin Classics, London, 1994.

新井勝『「小公女」梗概』、『少女の友』12巻8号－9号、1919年。

厳谷大四『名作物語 小公女』、『ひまわり』4月号、1950年。

水島あやめ『少女倶楽部十一月号付録 名作物語 小公女』、『少女倶楽部』、1936年。

川戸道昭・榊原貴教『明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》21 バーネット集』、ナダ出版センター、2000年。

二次文献

今田絵里香『「少女」の社会史』、勁草書房、2007年。

廉岡糸子『大胆不敵な女・子ども－『小公女』『秘密の花園』への道－』、（株）燃焼社、2003年

川戸道昭「バーネットと『小公女』－若松賤子、藤井白雲子の翻訳との関係を中心に」、『明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》21 バーネット集』、ナダ出版センター、2000年。

川端有子「インド/イギリス－『小公女』における文化の多義性」、日本イギリス児童文学会『Tinker bell』46号、2001年。

川端有子「インドの紳士の物語」、本多英明編著『英米児童文学の宇宙』ミネル

ヴァ書房、2002年。
川端有子『少女小説から世界が見える ペリーヌはなぜ英語が話せたのか』、河出書房新社、2006年。
酒井晶代「挿絵に見る『小公女』受容－1945年まで－」、『子どもと文化』9号、2002年。
酒井晶代「挿絵に見る『小公女』受容（2）－1946～1954年－」、『子どもと文化』10号、2007年。
目黒強「若松賤子訳「セイラ、クルーの話。」にみるジェンダー」、神戸大学文学部国語国文学会、2007年。
Gruner, Elizabeth Rose. “Cinderella, Marie Antoinette, and Sara: Roles and Role Models in *A Little Princess*”. The Lion and the Unicorn, 1998.

（大学院修士課程修了）

SUMMARY

F. H. Burnett's *A Little Princess* Translations Seen from Young Girls' and Gender Viewpoints in Japan

Asuka TORITAMARI

In Japan, F.H. Burnett's *A Little Princess* has been translated variously and supported by girls and women. The first Japanese-translated edition was published in 1910. The early translations of this work were dedicated to social educations for girls in Japan. And so these early Japanese *A little Princess* translations are dealt with from the viewpoints of a young reader and of gender. This paper focuses on how these early translations reflect women's and girl's education, prevailing moral codes, and their general social and cultural circumstances in Japan.

Through the novel, the protagonist Sara is often in trouble with her teacher Minchin. These conflicts between Sara and Minchin look natural. The novel depicts a typical story of success in life: a poor little girl comes to be happy and rich after overcoming hardships and troubles. Therefore, the readers naturally regard Minchin as a typical plot device to torment a poor protagonist. Understanding Minchin just as such a plot device, however, provides an inadequate explanation for the conflicts between Sara and Minchin through the novel.

Sara and Minchin have the same wonderful abilities; logical mind, strong will, and great patience, although Minchin is depicted as a "bad" woman. Between these characters, in fact, there is an overt difference whether she works or not. Sara is a little princess and, on the contrary, Minchin is a career woman. In other words, while Sara is non-worker and depicted as a "good" girl, Minchin is a hard worker and depicted as a "bad" woman. Moreover, becoming a little princess depends on appearing of "A Daddy-Long-Legs". Needless to say, the readers have no choice but to get married with men because such Daddies never appear to them. The novel supports modern patriarchy in Japan.